

## ■ Corporate Philosophy

### 小西酒造の歴史と白雪のあゆみ — since 1550

小西酒造の歴史は、戦国時代の1550年(天文19年)にさかのぼります。小西家の初代が薬種業のかたわらで酒造りを始めたことが、その原点です。以降、伊丹の地で酒造りを続け、「白雪」の名とともに475年の歩みを重ねてきました。

1600年(慶長5年)、伊丹の鴻池村にて、濁り酒に代わる透明感のある「清酒(諸白澄酒)」が誕生します。そして1635年(寛永12年)、小西家二代目・宗宅が江戸へ酒を運ぶ途上で富士山を仰ぎ、その気高さに感銘を受け「白雪」と命名しました。現存する日本酒の銘柄としては最古にあたる伝統の名がここに生まれたのです。

江戸時代、伊丹は近衛家が領主となり発展を支えており、小西酒造も酒を造るだけでなく問屋として流通を担い、伊丹を文化の町へと押し上げる一助を担いました。

1694年には江戸茅場町で酒問屋を営み、1697年には井原西鶴や近松門左衛門ら文化人が伊丹を訪れるようになります。1730年には「樽廻船」が登場し、江戸までわずか4~5日で酒を運ぶことが可能となり、白雪の名は広く知られるようになりました。

頼山陽や若山牧水など多くの文化人が白雪を愛し、詩や歌にその名を残しました。1821年の頼山陽の詩「千秋勧酌 芙蓉霞」が白雪のラベルに採用され、1916年には若山牧水が白雪にまつわる歌を7首も詠んでいます。こうして白雪は酒としての品質に加え、文化的価値をも併せ持つ存在となりました。

近代に入ると、1893年のシカゴ万国博覧会で金牌を受賞し、1925年には「天下之銘酒白雪」のキャッチコピーで広告を展開。1933年には「小西酒造株式会社」として法人化され、1939年からは「山は富士、酒は白雪」のコピーが全国に響き渡ります。戦後は食品事業を拡げ、1963年には業界初の四季醸造工場を建設しました。

1988年にはベルギービールの輸入を開始し、1995年には「白雪ブルワリービレッジ長寿蔵」を開設。酒文化を「学ぶ・遊ぶ・食べる・楽しむ」場として提供し、ビール製造にも本格的に進出しました。1997年からは阪神淡路大震災復興を願う「白雪蔵まつり」を開催、地域と共に歩んでいます。

21世紀に入ると、コーポレートスローガン「誰も歩いていない道を行く。」を掲げ、伝統と革新の両輪を磨き続けてきました。2020年には「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産に認定され、2024年には「GI伊丹」が指定されました。また同年12月には、「日本の伝統的なこうじ菌を使った酒造り」が、ユネスコ無形文化遺産として登録され、その母体となった「日本の伝統的なこうじ菌を使った酒造り保存会」の会長を小西新右衛門が務めました。

薬種業から始まった酒造りは、やがて日本最古の銘柄「白雪」として歴史と文化を刻み続け、今もなお新たな挑戦を続けています。